

Exhibition—The Beginnings and Early Spread of Photography: From the Collections of Nichibunken and Kagoshima University

Symposium—Multiple Origins of Photography: A Historical Reconsideration through Japanese and French Perspectives

展覧会

写真のはじまりと広がり

—日本文研と鹿児島大学の所蔵資料から—

シンポジウム

写真のはじまりの複数性—日仏の視点を介した歴史の再考—

主催 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター、鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター 助成 JSPS KAKENHI Grant Numbers JP25K16139, JP24K22433, JP24K63468, JP21K18116
左（女性像）ID320 ガラス湿板 国際日本文化研究センター蔵 右上 啓四郎とその息子たち（弥太郎と藤次郎）明治6年（1873）鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵 右下 木脇藤次郎 鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵

展覧会

鹿児島大学附属中央図書館ギャラリーアトリウム

2026

（中央図書館1階）

3.10（火）▶23（月）

休館日 3/12（木）・15（日）・20（金）・22（日）

開館時間 10：00～17：00（最終日は16：00まで）

シンポジウム

鹿児島大学

学習交流プラザ2階学習交流ホール

2026 3.14（土）

13：00～17：00（12：45開場）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies



国立大学法人
鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」
教育研究センター



人間文化研究機構の共創先導プロジェクト（共創促進事業）「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」事業の補助金を受けた事業です。

展覧会 写真のはじまりと広がり—日本文研と鹿児島大学の所蔵資料から—

1839年にダゲレオタイプ（銀板写真）がフランスで公表されて、今日に続く写真の歴史がはじまりました。その発明の源泉となった先人の取り組みは当然ありましたが、異なる印画方式にもとづく試行錯誤も、同時多発的に重ねられていました。その結果、私たちの想像をゆうに超える多種多様な写真が19世紀にうみだされ、日本を含め世界へと急速に広まっていきました。国際日本文化研究センター（日本文研）と鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターが主催しておこなう本展では、鹿児島大学附属図書館と日本文研が所蔵する関連資料をもとに、初期の写真が見せる豊かさや自由さをご紹介します。鹿児島大学附属図書館からは、幕末に薩摩藩が出版した科学技術書である『遠西奇器述』や、島津家に仕えた木脇家伝来の明治期の写真を、日本文研の所蔵資料からは欧米のダゲレオタイプに加え、これまであまり注目を集めてこなかった日本の庶民の湿板写真などを、いずれも主にパネルをつうじてご覧いただけます。

ダゲレオタイプは開国直前の1848年に日本に本格的にもたらされ、のちに薩摩藩主となる島津斉彬（1809-58）のもとに渡ったと考えられています。その証しとして、1857年に島津斉彬を鹿児島で写し留めた肖像写真が、日本人が作成したダゲレオタイプとして唯一現存し、鹿児島の尚古集成館に伝わっています。日本への写真の移入から150年以上を経たいま、はじまりの地のひとつである鹿児島で、黎明期の写真が放つ輝きとそれをうみだした好奇心、そして、写真に見出されていた希望と可能性にふれていただければ幸いです。

【会期】2026年3月10日（火）～23日（月）ただし、3月12日（木）・15日（日）・20日（金）・22日（日）は休館
 【開館時間】10:00～17:00（最終日は16:00まで）
 【会場】鹿児島大学附属中央図書館ギャラリーアトリウム（中央図書館1階）〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番35号
 【入館料】無料

シンポジウム 写真のはじまりの複数性—日仏の視点を介した歴史の再考—

写真は、魅惑的な摩訶不思議さを有しながら、21世紀に至るまで人びととともに在り続けてきました。では、身近にある写真それ自体は、そもそも何なのでしょう。「写真とはなにか」。この雲をつかむような問いは、自然と、写真のはじまりにたいする探究へと私たちを向かわせます。鹿児島は、日本における写真のはじまりの地のひとつとして重要ですが、日本であっても世界であっても、写真の歴史は単線的ではなく、あたりまえに複線的であったという事実を指摘しておく必要があります。国際日本文化研究センター（日本文研）と鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターが主催する「写真のはじまりと広がり—日本文研と鹿児島大学の所蔵資料から—」展の同時企画となる本シンポジウムでは、写真をうみだした国のひとつであるフランスにゆかりのある講演者をお招きし、日仏を軸に俯瞰した視点から、「写真のはじまりの複数性」を考えます。それぞれの講演者が向き合っている対象は、写真に限定されません。視覚文化、メディアなど、写真を包含する、あるいは、写真に隣接する対象が、議論には含まれます。本シンポジウムにおける議論が、「写真とはなにか」という根源的な探究につながる試みのひとつとなることを願っております。

講演者紹介

Cecile Laly（セシル・ラリ）

ソルボンヌ大学で2011年に美術史の博士号を取得し、現在、京都精華大学の特任講師を務めている。大学院時代以来、日本写真史を専門として研究を行ってきた。博士論文では写真雑誌『光画』（1932-33年）を分析した。近年は、日本の近代写真に関する研究を再開し、写真家の中山岩太の作品に焦点を当てている。また、2013年以降は日本における建築写真についても研究を行っており、とりわけ特定の場所や建築物が写真家にとっていかにインスピレーションの源となりに注目している。

村上華子

東京大学文学部、東京藝術大学大学院映像研究科修了。現在パリを拠点に、写真の発明をめぐるリサーチを基盤としたインスタレーションを制作。2019年アルル国際写真祭新人賞にノミネート。作品はCNAPやGetty Museumに収蔵され、国内外の美術館やギャラリーで発表を続けている。

太田純貴

鹿児島大学准教授。専門は美術芸術学、メディア（文化）論。現在の研究テーマは、芸術作品におけるタイムマシン／タイムトラベルと身体の間接の解明、およびメディア考古学の理論的射程・系譜の探求、メディア文化・理論とSF（的発想）の関係の解明。それらの延長として、メディア文化における物質の位置付けや、日本の伝統工芸（技法）と西洋の技術の接点についても、興味関心がある。

安藤千穂子

国際日本文化研究センタープロジェクト研究員。専門分野は日本初期写真史。2024年、京都工芸繊維大学にて博士（学術）。大きな研究関心は日本における写真受容にあり、博士課程では薩摩藩主の島津斉彬による写真実践の再検討に取り組んだ。現在は、19世紀半ばに日本人が見た可能性のある欧米の写真の再発掘と、幕末・明治期の庶民の肖像写真の再評価を主なテーマとしている。



左（子どもたち）ID302 中（相模原吉福像）ID396 明治26年（1893）右（女性と子ども）ID387 いずれもガラス湿板、国際日本文化研究センター蔵

【日時】2026年3月14日（土）13:00～17:00（12:45開場）
 【会場】鹿児島大学学習交流プラザ2階学習交流ホール
 〒890-8580 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番24号
 【事前申込】不要 【参加費】無料 【使用言語】日本語

プログラム

13:00-13:05	開会の挨拶：安藤千穂子
13:05-15:05	講演
15:05-15:45	休憩
15:45-16:45	全体討議／質疑応答
16:50-17:00	閉会の挨拶：丹羽謙治（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター長、鹿児島大学法文学部教授）



会場

【展覧会】鹿児島大学附属中央図書館ギャラリーアトリウム（中央図書館1階）
 【シンポジウム】鹿児島大学学習交流プラザ2階学習交流ホール

鹿児島中央駅からのアクセス

〔市電2系統〕「唐湊（とそ）」もしくは「工学部前」電停下車

〔市営バス11番線 鳴池・冷水線〕、「法文学部前」下車